

パタン・ランゲージによる設計プロセスに関する研究 —— 盈進学園東野高等学校の建築を事例として ——

小 谷 梨 花
(環境・建築芸術学)

パタン・ランゲージとは、建築家クリストファー・アレグザンダーによって、1970年代に提唱された理論である。1977年に出版された『パタン・ランゲージ』は、環境を構成している要素を253に集約し、それらの組み合わせによって都市や建築を設計する際のツールとしてアレグザンダーによって考案された。

本研究では、パタン・ランゲージ理論を用いて建設された事例として1985年に埼玉県入間市に建設された盈進学園東野高等学校を取り上げ、主に理論と実践、また建設当初と現在という観点で比較・分析を行っている。利用者参加型設計ツールとしてパタン・ランゲージがどのようにプロジェクトに反映し、また現在の利用者に影響を与えているかを明らかにするため、分析方法の一つとして、盈進学園東野高等学校の教職員や生徒(269名)を対象とした利用者アンケート調査を実施した。

本論文の構成は、第1章でパタン・ランゲージに至るまでのアレグザンダー理論の変遷を追い、パタン・ランゲージ理論がどのような流れで形成されたのかについて初期理論を元に検証を行った。第2章では、その理論の実例として盈進学園東野高等学校を取り上げている。建設時に用いられたプロセスと完成した施設を比較することで、施主と建築家の架け橋となるコミュニケーションツールとしてのパタン・ランゲージの可能性を示した。そして第3章で、現在の利用者である生徒と教職員の方々に対して行った「施設利用者アンケート」の結果や、竣工後行われた残工事や現在行われている改修工事の分析を通して、建設時と現在の利用者間のニーズの変化を確認した。利用者が建築家から提案された意見を選び取る受容の姿勢ではなく、自発的にもものづくりに参加できるパタン・ランゲージを用いた建設プロセスは、利用者の意識の向上によって建物の質も向上させる相乗効果がある。明確な要求を持つ利用者が設計に加わることができるこのツールの使い方を今一度見直すことで、作られる建築の質が上がるとともに利用者の意識の向上にもつながると考える。